

時平像の形成

南里, みち子
長崎県立大学教授

<https://doi.org/10.15017/11901>

出版情報 : 語文研究. 72, pp.1-12, 1991-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

時平像の形成

南 里 みち子

藤原時平について考えるとき、それが歴史上の問題であれ、伝承上の問題であれ、菅原道真の存在を抜きにして考えることはできない。

時平は貞観十三年（八七二）、基経の長男として生まれ、基経なきあと、宇多・醍醐両天皇に仕えて、政界に重きをなした。特に延喜二年（九〇二）、初の「荘園整理令」を発するなど、律令制の再建に努め、醍醐天皇を輔佐して推進した政策は、後世「延喜の治」と称されている。

時平が二十九歳の若さで左大臣となった昌泰二年（八九九）二月、道真は右大臣となり、延喜元年正月には、ともに従二位に叙した。その直後に道真は突然大宰権帥に左遷された。理由は上皇を欺いて、廃立を行おうとしたというもので、女婿齊世親王の即位を策したものと解釈されている。道真は宇多天皇の信任が篤く、その抜擢異例の昇進も、天皇が藤原氏の専横をおさえることを意図したものであった。道真の左遷は、時平を中心とする反道真勢力の工作であり、藤原氏による他氏排斥の一つと考えられる。

二年後、道真は配所に没し、その六年後には時平も没した。道真

の死後、怨霊の発現が取り沙汰されるようになり、時平とその一族の早逝は、菅霊の報復によるものと考えられた。以後、天神信仰は非常に高まりを見せ、多様な変化を遂げながら、その流れは現代に至るまで続いている。天神信仰の盛行にともない、種々の伝承が生じたが、時平はそのなかで讒臣として規定され、ついには極悪人とされるに至っている。時平像の変遷は、単に時代による変化といつたものではなく、伝承者あるいは享受者の問題が密接にかかわっていると考えられる。

時平には、天神信仰とは無縁の説話も伝えられており、時平という人物の多面性を浮き彫りにしている。そこで、時平に関する種々の伝承を、特に初期のものから室町期までのものに限って比較しながら、時平像形成の過程を見ていくことにしたい。

一

宇多天皇は仁和三年（八八七）の即位早々に、阿衡問題で窮地に立たされることになった。天皇の窮状を救ったのが、当時讃岐守と

して任地にあった道真であつて、以後、天皇と道真の密接な關係が続くことになった。天皇は寛平九年（八九七）に讓位するにあつて、皇太子敦仁親王に「寛平御遺誡」を与え、帝王の心得を示した。そのなかで天皇は、信賴すべき輔佐として時平・道真をあげ、時平については、

左大将藤原朝臣は、功臣の後なり。その年少しといへども、すでに政理に熟し。

と評し、「能く顧問に備へて、その輔道に従へ」と述べている。道真については特に多くの筆を費し、信任の格別であつたことを示している。道真を鴻儒とし、「深く政事を知れり」と評したうえで、立太子の相談も、讓位の意中も、道真だけに語り、他人は関与していなかったという事情を明らかにし、

愆てこれを言へば、菅原朝臣は朕が忠臣のみに非ず、新君の功臣ならむや。人の功は忘るべからず。

と結んでいる。⁽¹⁾以上の記述から、宇多天皇が道真に格別の信賴を示しながら、第一の臣としての時平の存在を十分に重視していることがうかがえる。

宇多天皇が両者に与えた評価は、当を得たものでもあつたのだから、『大鏡』以下の作品に、その影響を認めることができる。『古今著聞集』卷三は、宇多天皇が新帝の輔佐として、時平・道真他三名の名をあげたことを伝えるが、その人物評までは伝えていない。

『大鏡』時平伝は、時平伝とはいひながら、道真の配流と配所での詩歌に関する記事が比重を占めている。本書は道真配流の原因となつた両者の關係について、次のように説明している。

醍醐の帝の御時、この大臣、左大臣の位にて年いと若くておは

します。菅原のおとど、右大臣の位にておはします。その折、帝御年いと若くおはします。左右の大臣に世の政を行ふべきよし宣旨下さしめたまへりしに、その折、左大臣、御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八にやおはしましけむ。ともに世の政をせしめたまひしあひだ、右大臣は才世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても、ことのほかにかしこくおはします。左大臣は御年も若く、才もことのほかに劣りたまへるに、右大臣の御覚えことのほかにおはしましたるに、左大臣やすからず思したるほどに。

時平と道真は、宇多天皇の即位前後の事情から、天皇によって意図的に、対立者の位置に置かれたという側面があつた。そして両者のこのような關係は、死後の伝承の世界において、より強固なものとなつていった。両者は善悪あるいは正邪といつた対照性をきわだたせながら、常に表裏一体の存在のように登場してくることになるのである。ただし、時平に批判的な伝承ばかりではないこともまた事實である。『大鏡』は、時平一族の早逝を、時平の「あさましき悪事を申し行ひたまへりし罪」によるものと説明したうえで、

さるは、やまとだましひなどは、いみじくおはしましたるもの

を。

と、その政治力を評価している。また、『江談抄』第三は、次のような説話を伝えている。

昔菅家爲右府。時平爲左府。共人望也。其後右府有「事被」流。左府薨逝。故時人稱有「人望」之者。號「右流左死」云々。ところで、道真の学者、文人としての事蹟は、万人の認めるところであつて、その評価はゆらぎようもない。『菅家文章』『菅家後集』

には、数多くのすぐれた詩文がのこされている。また、修史事業の面での功績も大きく、『日本三代実録』の実際上の撰者は道真であるといつてよい。延喜元年の完成奏上時に道真が左遷されていたため、その名は除かれたらしく、正式の撰者として藤原時平・大感善行の名をあげている。『類聚国史』も道真の撰になるものである。

道真は漢詩文だけではなく、和歌の方面でも評価されている。『古今集』以下の勅撰集、『大鏡』等の作品に道真の詠歌と伝えられるものはかなりの数になるが、その中には、後世、道真に仮託されたものが多く含まれているとされる。そして、和歌の面では、時平も道真に劣らないだけの実績をあげている。『後撰集』は歌人伊勢との贈答歌を多く伝え、『古今集』にも二首入集している。昌泰元年（八九八）秋の「亭子院女郎花合」には、壬生忠岑等とともに出詠しており、時平が主催した歌合が「本院左大臣歌合」として伝わっている。宇多天皇から醍醐天皇の時代にかけて、ともに政界に重きをなした時平・道真について、政治家としての資質は、時平の早逝という条件も加わって、にわかに優劣を決めたい面があるにしても、学問・文芸の分野における両者の差は歴然としている。その点からすれば、さきにあげた『大鏡』の時平評は、道真びいきの感情が作用しているにしても、ほぼ妥当なものといふことができよう。

二

宇多天皇が時平を「その年少しといへども、すでに政理に熟し」と評したことは、さきに指摘した。醍醐天皇のもとで、政治的実績をあげつつあった時平の事蹟に汚点を残すことになったのが、道真

失脚事件であつて、この事件が時平自身の滅亡を招くことにもなった。以後の時平評は、道真の失脚に大きく作用されているのが一般であるが、説話資料が伝える時平の説話は、政治家時平の多面性を伝えている。

時平が醍醐天皇との見事な連携によって、世間の過差を鎮めたという説話が、『大鏡』『今昔物語集』巻二十二に伝えられている。

醍醐天皇が世間の風儀を取り締まろうとしたが、過度のせいたくを鎮めることができなかつた。そのとき時平が禁制を破つた華美な装束を身につけて参内し、勅勅にふれて、一箇月間門を閉じ、御簾の外にも出ないで謹慎した。一人である時平が勅勅に触れたことで、過差は鎮まつたが、これは帝と時平がしめし合わせてしたことであつた。

道真を失脚させた一連の行動に端的にあらわれているように、時平は策略家であつた。あらゆる策略を弄して目的を遂行する時平のやり方は、祖父良房の、承和の変によって恒貞親王を廃し、応天門の変によって伴善男を除いたやり方に通じるものでもあつたが、一度笑いだすとどうしようもなくなるといふ、愛すべき一面も持つていた。『大鏡』は、道真の意向を無視して、強引に政治を行おうとした時平が、その笑癖を利用され、無理非道を封じられたという説話を伝えている。

『大和物語』は、藤原定国が夜ふけて突然時平邸を訪れたときの、交歓の様子を伝えている。時平は驚きあわてながらも、壬生忠岑の「かささぎのわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけことさらにこそ」の歌に感じて、一晚中酒を飲み、音楽の遊びをしたという。

定国は醍醐天皇の外祖父高藤の男で、「寛平御遺誠」にその名が認

められる。天皇の側近として、政治的に時平に近い関係にあった。忠岑は三十六歌仙の一人、『古今集』の撰者の一人でもあったが、はじめ定国に仕えていた。時平は若いときから和歌に関心を示し、「亭子院女郎花合」には、時平・忠岑がともに出詠しており、和歌を通じての交遊も認められる。

時平の風雅な側面は、『今昔物語集』巻二十二の説話からも窺うことができる。本書は時平を、次のように紹介している。

年ハ僅ニ三十許ニシテ、形チ美麗ニ有様微妙キ事無限シ。然レバ、延喜ノ天皇此ノ大臣ヲ極キ者ニゾ思食タリケル。³⁾
また、時平が伯父国経の北の方を手に入れるために、年始の慶賀に出向いたときの様子は、次のように伝えられている。

其ノ中ニモ左ノ大臣ノ御形ヨリ始メ歌詠ヒ給ヘル有様、世ニ不似ズ微妙ケレバ、万ノ人目ヲ付テ讚メ奉ルニ、

国経の北の方が若い時平に心を奪われていく様子を語り、話に興を添えるための手法とはいいながら、時平について、このような伝承が認められることも、また事実である。

本書はまた時平について、

此ノ大臣ハ色メキ給ヘルナム少シ片輪ニ見エ給ヒケル。

と評している。時平が国経の若い北の方を、策略を用いて手に入れたことについては、『大和物語』『十訓抄』第六にも関連の記事がみえる。時平の好色は、宇多天皇の知るところでもあって、「寛平御遺誠」も、「先の年女のことにして失せるところあり」と、その点に言及している。『十訓抄』は時平が平貞文と本院侍従の仲をさまたげたと伝え、道真を陥れたことによって、自らの滅亡をも招いた行動をもあわせて、「時平はすべておこれる人にておはしけるにや」と

評している。

以上、撰閑家の嫡流として、若くして左大臣の地位につき、政治的手腕にも恵まれた時平の、思うままの行動を、説話によって見てきた。このほか、時平の実績を伝えるものとして、『江談抄』第五「日本紀撰者事」に、『三代実録』の撰者を時平であるとしているが、その内実については、さきにふれたとおりである。

時平が藤原氏の権力を確立するために道真を失脚させたことは、時平にとっても決定的な影響をもたらした。道真の配流、大宰府における死、死後の報復、その後の神格化の過程を物語る伝承が、『北野天神縁起』『神道集』巻九「北野天神事」御伽草子「天神の本地」等の作品において、一つの大きな流れをなしている。その流れとは別に、道真配流前後の事情を伝える説話が『宝物集』『十訓抄』『古今著聞集』等に伝えられている。

『宝物集』諸本のうち、道真配流の説話を伝えるのは、一卷本片仮名古活字三巻本・第一種七巻本・第二種七巻本の系統である。⁴⁾ 本書は時平について、菅原右大臣が年長で身の才もすばらしかったので、左大臣時平が不満を抱き、虚言を言いつけて右大臣を筑前の国に流したと伝えている。『十訓抄』第六は「菅原道真恩賜御衣詩事」において、右大臣道真が「本院のおとゞの奏事不実」によって、俄に大宰権帥にうつされたとする。『古今著聞集』巻四も同様の内容を伝えるが、両書ともに時平については、詳細を伝えていない。

右大臣右大将として、顕栄の頂点にあった道真が、突然大宰権帥にうつされたことが劇的であったと同様に、道真を排除したことによって藤原氏の権力を確立し、政治的な実績をあげつつあった時平が、道真の没後六年めに於いて、三十九歳の若さで没したこともまた、

劇的であつた。両者の久しからざることは、相人によって予見されていたという説話が、『古事談』第六に伝えられている。

ある相者が、醍醐帝・保明親王・時平・道真・忠平等を相した。相者は、醍醐天皇は国体に叶わずと相し、保明親王は容貌国に過ぎ、時平は賢慮国に過ぎ、道真是才能国に過ぎ、ともに久しかるべからずと相した。そして忠平については、才能・心操・形容ともに国に叶い、久しく奉公するであろうと相した。

この説話では、醍醐帝以下の人物が一堂に会していたという設定になっているが、保明親王は道真没後に誕生しており、両者が同席することは不可能である。説話の原型をなすのは、『大鏡』下雑々物語にみえる、つぎのような説話であろう。

繁樹が狛人のもとを訪れていたとき、昭宣公の君達三人が来あわせた。狛人は時平を、容貌・才覚ともに日本には過ぎていてとして、「日本のかためと用ゐるむにあまらせたまへり」と相した。また、枇杷殿を心が美しく素直すぎてへつらい飾った小国には向かないとし、貞信公を「あはれ、日本国のかためや。ながく世をつぎ門ひらくこと、ただこの殿」と相した。

名門に生まれた三兄弟の性格の相違と、それぞれがたどつた運命の不思議に対する興味が、このような説話を生んだものであろう。

『続古事談』第二は、忠平が太政大臣になつたとき、次のように語つたという説話を伝えている。

前皇（醍醐）が兄時平を太政大臣になすように仰せられたが、時平が、弟忠平が必ずこの官にいたるであろうから、一門に二人の太政大臣はいるべきではないと、勅命を受けなかつたと言つたというのは間違ひである（後略）。

時平は没後太政大臣を贈られているが、この説話はその家柄・器量からして、時平は当然太政大臣になるはずの人物であつたという評価が存在していたことを示している。そして、ここにとりあげた三話は、時平びいきの説話といふことができる。

以上のように、鎌倉期までの説話資料が伝える時平像は、実像そのままではないにしても、実像からそれほどかけ離れたものではない。これに対して、『北野天神縁起』にはじまる縁起系統の説話において、時平像は実像を離れて、次々に変貌を遂げていく。次項において、その様相をみていくことにしたい。

三

『北野天神縁起』の伝本は、膨大な量にのぼる。現存諸本中、原態に近いとされているのは、『北野文叢』所収五条菅家本（建久本）、神宮文庫蔵寛文二年写本（建保本）である。建久本・建保本は縁起文のみを伝え、絵は伴っていない。続く承久本（根本縁起）は絵巻の形式をとっているが、日蔵地獄巡り以降の記事は省略され、六道絵がそれにとつてかわつてゐる。以後、鎌倉室町期を通じて絵巻の製作は盛んであつたが、絵巻とは別に、安楽寺本系統の諸本が伝えられている。この系統の本文は、絵巻系統に比較して、菅公の伝記と北野社草創にかかわる記事が削減される一方で、道真の受難と怨霊の報復の記事が大幅に増補され、縁起から物語への成長が認められる。『神道集』巻九「北野天神事」も安楽寺本系統の本文がとられ、それが御伽草子「天神の本地」の成立へとつながつてゐることが、明らかにされている。そして、時平像に著しい変貌が認められ

るのは、この系統においてである。

安楽寺本系諸本と御伽草子系諸本は、内容面から明確に区別することができる。時平像の比較に用いた二つの系統の諸本は、次のようなものである。

[1] 安楽寺本系

- 。北野天神御縁起 安楽寺本 写一冊 内閣文庫蔵
- 。洛陽北野天神縁起 大一冊 江戸初期写 (神道大系)
- 。天満天神縁起 大一冊 康暦写本 筑波大学蔵 (大成十)
- 。天神御本地 卷子本一軸 室町中期写 赤木文庫蔵 (大成補遺一)

- 。天神の本地 元奈良絵本三帖 (大成補遺二)
- 。神道集卷九北野天神事 (東洋文庫本)

[2] 御伽草子系

- 。天神縁起 (仮題) 絵巻一軸 大阪天満宮蔵 (大成十)
- 。天神絵巻 一軸 室町末 天理図書館蔵 (大成十)
- 。天神本地 (仮題) 絵巻一軸 室町末期写 (大成補遺一)
- 。菅丞相絵巻 一軸 室町期 (御伽草子絵巻)
- 。てんしん 奈良絵本二冊 (物語集一)
- 。天神記 絵巻一軸 (物語集一)
- 。天神本地 大二冊 慶安元年刊本 (大成十)

このうち、大阪天満宮蔵本は、冒頭が菅原大臣と時平の紹介に始まっている、時平の内裏放火と讒奏の記事が認められる、左右大臣の不和の原因を小鼓・両張面のやりとり由来すると説明しているなどの点で、御伽草子系の特徴を備えている一方で、天祥山に祈願、柘榴天神、清涼殿落雷、賀茂川洪水、淨蔵加持、時平一族早逝など

の記事内容、本文ともに安楽寺本系のものである。ただし、安楽寺本系諸本に認められる公忠蘇生以降の記事は認められない。本書は安楽寺本系から御伽草子系への移行の過程を示すものであろう。

「菅丞相絵巻」は冒頭に欠文があり、末尾は飛梅伝説の記事で終わっているため、清涼殿落雷の記事を比較することはできない。絵巻系統の諸本は、本文の異同がそれほど大きくはないので、建久本のみを比較するにとどめておく。

絵巻系・安楽寺本系・御伽草子系の三系統の諸本において、時平が登場するのは、(一)時平の讒言、(二)清涼殿落雷、(三)淨蔵加持の三つの場面に限られている。次に、それぞれの項目について見て行くことにする。

(一)

時平讒言の説話は、各系統に設定の相違はあるにしても、共通して存在し、時平と讒言とは切り離しがたいものになっている。『宝物集』『十訓抄』『古今著聞集』等もその点に触れているが、「虚言」「奏事不実」とややぼかした表現になっており、その内容にも触れていない。これに対して、縁起系統の説話では、そのいきさつ、内容が詳細に伝えられている。

絵巻系は、次のような事情を伝えている。

昌泰三年(九〇〇)正月三日、延喜帝と寛平法皇の密議があり、左右大臣の器量を比較したうえで、道真一人に政務をとるよう
に仰せがあった。時平はこれを恨み、陰陽寮の官人に命じて道
真を咒咄したが、ききめがなかったため、同四年正月二十九日、
時平の讒奏により、流罪の宣旨が下った。

安楽寺本系諸本のうち、これに比較的近いのが『神道集』である

が、讒奏の内容を具体的にしている点が異なる。即ち、延喜帝が不賢ゆえ、式部卿の宮の即位を道真が画策している。法皇の許しも得ているので、事がおこらないうちに、道真を討つようというものであった。安楽寺本以下の他の諸本は『神道集』に近いが、昌泰三年の密議には触れていない。両皇が左右大臣を比較して、道真の器が拱籥の臣たるにふさわしいと考えたということだけを伝えてい

る。繪巻系は、両皇が実際に朱雀院に会し、左右大臣のうち、一人を選んで政治を任せようと議したとする。事の大事に恐れた道真が、詩宴のことにまぎらせたが、密議のことがもれて、時平が咒咀、讒奏に及んだとするもので、その動機が明確に説明されている。時平の行動は、延喜帝・宇多法皇によって排除されようとしたことに対する報復とみなすことができ、それなりの正当性を持つことにな

る。『神道集』もほぼ同様であるが、密議のことがもれたという記事はなく、讒言の内容を延喜帝廃立のことと、より具体化している。実際にこの種のが左遷の理由とされたらしいが、延喜帝不賢を理由にあげ、法皇の許しも得ているとして帝を孤立させ、機先を制して道真を討つように勧めているあたりに、話を単純かつ明瞭にしようとする意図がみえると同時に、時平の策略家としての面が浮き彫りにされてきている。

安楽寺本以下の諸本においては、両皇密議のことは省略され、左右大臣の器量の比較のみがされている。道真より劣っていると評された時平が、そのことを恨んで道真を咒咀し、讒奏したわけで、時平の行動には正当性は全く認められない。単に優者に対する嫉妬の情からきた行動ということになって、道真の側からすれば悲劇性の

増加ということになるが、時平の側からすれば、非道性の増加とい

うことができる。

一方、御伽草子系では、時平は自分は内裏にいながら、郎等に命じて火をかけさせ、二条の大路に避難している帝に、道真のしわざであると讒奏したことになる。

時平のおとは、才覚・歌・連歌の道にいたるまで、菅原の大臣には劣っていた。君の覚えもそれほどでもなく、狩衣装束であったが、菅原大臣は束帯冠を許されていた。時平はゆくえも知らぬ人が公卿殿上人になつたうえに、自分を越えるのは口惜しいと、郎等に命じて内裏に火をかけさせた。

御伽草子系諸本に伝えるところは、大体以上のようなものであるが、左右大臣の衣装に触れるのは、大阪天満宮蔵本・「天神絵巻」・「天神記」で、他本にはみられない。

安楽寺本系から御伽草子系への過渡的な内容を伝える大阪天満宮蔵本には、伴大納言が登場する。

時平のおとど・伴大納言は立派な公卿であったが、才覚・詩歌・管弦の方面でも菅原大臣には劣っており、帝のおぼえもそれほどもなかったため、世間はこそぞ菅原の大臣をほめた。伴大納言は渡唐して、内裏を学び写して帰朝し、我朝の内裏をつくりかえようとしたが、この内裏のあるうちはつくりかえることはあるまいと、ひそかに火をかけて、内裏を焼こうとした。

時平が内裏に放火する以前に、伴大納言が放火しようとしたという挿話が認められるのは、他本に例を見ない。大納言は、これに続く左右大臣の小鼓・両張面のやりとりの場面にも登場するが、これ

といった役割は果たしていない。しかし、本書に伴大納言の名が見え、内裏に放火しようとしたという記事が伝えられていることは、時平の内裏放火の説話が、応天門の変に着想を得たものであるという作者の手の内を、みずから明かしていることになる。

応天門の変に関する説話は、『宇治拾遺物語』巻十「伴大納言応天門を焼く事」に認められる。本書は事件について、伴大納言とその子中庸・雑色のとよ清が応天門に放火しておいて、大納言が左大臣源信のしわざであると訴えたと伝えている。太政大臣藤原良房は事件を聞いて参内し、讒言の可能性があるので、よく調べたうえで処置するようにと奏上し、源信は救われたという。

事件の真相は明らかではないが、良房が伴大納言伴善男を排除するために画策したものとされている。良房は時平の祖父であるが、ここでは時平と伴大納言が「讒言」という共通項で結びついている。延喜帝廃立を理由に道真を陥れた時平の讒言が、内裏放火のことで源信を陥れようとした伴大納言の讒言とすりかえられているわけである。

御伽草子系諸本において、このような改変が行われた理由として、社会体制の変化と、享受層の問題が考えられる。御伽草子の成立期にあたる室町期は、下剋上の風潮が支配的であった。政界の対立抗争も、権謀術数をめぐらす貴族社会のそれとは趣きを異にし、直接的行動を伴なうことが多かったであろう。もう一つの要因としては、物語の享受層が庶民層にまで広がってきたことがあげられる。低年齢層を含む教養の低い階層にとって、天皇の廃立といった抽象的な問題よりも、放火のような直接的で身近な問題の方が、理解しやすかったことは当然である。

其時、しへひのおとと、御車のなかへに、とりつきて、申されけるは、ひ付こそ、すかはらの大臣の、しわざと、おほえ候、御ゆるされを、かふむりて、をしよせ、くひをきり候はん」と、申されければ
(天神絵巻)

に見えるような、車の轅に取りついていたの讒奏、「をしよせ、くひをきり候はん」といった直接的行動による表現は、その間の事情を物語っている。左右大臣の狩衣・束帯の装束の相違も、両者の器量、帝のおぼえ、声望を含む総合的な評価を、身につけている衣装によって表現し、物語を平易にしたものと考えられる。

道真の物語が、応天門の変と結合することを容易にした事情としては、このほかに清涼殿落雷事件の連想から、内裏の火災の場面が導き出されやすいこと、あるいは、伴大納言に、御霊信仰との関係が認められること、などがあげられる。道真・伴善男ともに御霊信仰とかかわっているわけである。

この段を時平に視点置いてみるならば、素性の知れない道真によって、敗者の位置に立たされた時平が、放火という非常手段に出て、道真を抹殺しようとしている。敵を抹殺するためにみずから大罪を犯したうえで、帝に「くひをきり候はん」と申し出、遠流のことが決定すると、大喜びをしている。その行動、感情は単純明瞭で、庶民層に理解しやすいものになっている。時平は二条の大路で情容赦もなく道真を召し取ると、物も言わず自分の御所の一間に押しこめ、番人を置いてきびしく守らせたという。時平は自ら非常手段に出て道真を遠流に導き、その後の処置についても、朝廷に委ねることなく、自身がその任にあたっている。ここでは時平は公人としてではなく、私人として行動しているわけであって、そのことは、

道真を護送して大宰府まで行った武士たちが復命したとき、道真と通じていることを恐れて、殺させたことにもあらわれている。

安楽寺本系においては、帝は時平の讒奏を信じ、逆鱗静かならず、菅丞相の流罪を自ら決定している。これに対して、御伽草子系では、帝は時平の讒奏を疑いながらも、「世のいましめ」と考え、「いけどりにして遠流すべし」と定めている。帝は道真の死を廢して遠流にとどめたという点では、庇護者の立場に立っている。安楽寺本系において、帝と時平は、道真の悲劇に対して共同責任を負った形になっているが、御伽草子系では、時平一人がその責を負っているわけである。

御伽草子系における時平は、道真を抹殺するために内裏放火、讒奏、遠流、護送の武士の抹殺と、あらゆる手段を講じているわけであり、表現は稚拙ながら、その行動性には見るべきものがある。悪役としての時平像は、このあたりで一応の完成をみたといつてよいであろう。

(二)

清涼殿落雷の説話も、絵巻系・安楽寺本系・御伽草子系のすべての系統で伝えているもので、大宰府でこの世の生を終えた道真が、師法性房のもとに行き、報復を訴える「柘榴大神」の段に続いているのが普通である。御伽草子系における清涼殿落雷説話の位置づけ、内容には、諸本により変化のあとが認められる。

絵巻系は二度の清涼殿落雷を伝えている。その第一は「柘榴大神」の段に続くもので、道真の怨霊が宮中に至って、雷電霹靂したとき、清涼殿では時平一人が太刀を抜き、朝廷に仕えては自分の次の位だったのだから、神となっても自分に遠慮すべきだと、天をならん

で言い放ったと伝える。

『大鏡』によったと思われるこの説話は、政治家時平の剛毅な一面をよく伝えている。

第二は延長八年(九三〇)六月二十六日の清涼殿落雷事件の記事である。殿上に議していた廷臣が落雷によって死亡するという事件の衝撃によって、延喜帝は讓位し、やがて崩御するが、事件が衝撃的であったわりには、説話としては、それほど成長を遂げていない。

安楽寺本系は二つの清涼殿落雷の記事のうち、第一の落雷の記事内容を大幅に増補し、雷神に対して毅然とした態度を見せていた時平が、菅霊の憤りの激しさに触れ、氣力も失せて、ただ観音にすぎただけになった様子を伝えている。

道真が法性房のもとを去ると、黒雲がたちまちに都のうちに遍満して、振動雷電した。内裏では本院の大臣が太刀を抜きかけ、菅丞相の怨霊ならば、平生の昔には時平にとっては一階の下臈であった。簡単に時平を蹴殺すことがあつてなるものか。まして、一天の君四海の主を犯すことはできないはずである。臣下として鳳城を破ることは、上恩下忠の礼儀乱れて愚迷の恥一門を贖すものである。王城の鎮守内裏の守護神、日吉山王不覚し給うなど大声で叫ぶけれども、雷電は少しも静まることがない。道理をせめて菅霊と対決し、屈することのなかつた時平も、雷電霹靂のあまりの激しさに、太刀を収め、掌を合わせて観音を念ずるほか、なすすべもなかつた。

時平は菅霊の憤りの激しさに、観音にすがることによって、かうじて持ちこたえているありさまで、随所に強烈な観音信仰の認め

られることが、この系統の特徴である。

御伽草子系は、大阪天満宮本を除いて、時平がこのときに雷に蹴殺されてしまうことで一致している。黒雲がかかり、雷電が激しくなったとき、時平は我身の誤りのあるゆえに、肝魂も消え、嘆き悲しんだが、そこに稲妻がおおいかり、時平の狩衣の姿もなく、頭も骨も砕け、袋に砂を入れたようであった。

御伽草子系では、時平は落雷により無惨な最期を遂げる。安楽寺本系が時平と雷神との対決によって、菅壺の憤りのすさまじさを描き出しているのに対し、この系統では、袋に砂を入れた如くと形容される時平の残骸そのものが、道真の怨念をあますところなく伝えられる効果的である。また、安楽寺本系が時平と同じく雷電に悩まされ、観音にすがる帝を描いているのに対し、この系統では、報復が帝に及ぶ以前に法性房が駆けつけ、祈禱の力でその憤りを和らげたとする。法性房の祈禱によって、道真は怨神から、皇基を守る神としての存在にまで高められている。そのことによって、帝だけでなく京中の人も救われたわけで、

其後、此よしき、て、こ、ろあるなきも、しへいのおと、をうらみ、ほつしやうはうとそ、ほめぬ人はなし (天神絵巻)

と伝えられている。時平に対する道真個人の怨みは、道真が皇基を守る神となることによって、万人が共有するものになり、ここに時平は、悪役として定着させられることになったわけである。

(三)

御伽草子系において、時平は清涼殿落雷によって、無惨な最期を遂げた。おそらく筋の簡略化へと意志が働いたためでもあろうが、それなりに十分効果的ではある。従って、時平の病と浄蔵の加持を

伝える説話は、当然削除されており、絵巻系・安楽寺本系のみが、浄蔵加持の説話を伝えている。

絵巻系が伝えるところは、次のようなものである。

延喜九年三月のころ、本院大臣は重病にかかり、手をつくしても効果はなかったため、菅丞相の靈気のためと悟った。法験だけが助け得るか、浄蔵を請じて祈らせた。折から、善相公が見舞に来あわせたところ、大臣の左右の耳から青龍が頭を出し、善相公に「自分が梵天帝釈の許しを得て怨敵に報復しようとするときに、尊閣の男浄蔵がたちまちに降伏しようとしている。制せられよ」と告げた。相公がこれに恐れて浄蔵に知らせ、浄蔵が夕暮になって退出すると、大臣はたちまちに薨じた。御年三十九であった。

この説話は「浄蔵伝」によったものと思われる。

安楽寺本系は絵巻系に比して、増補のあとが著しく、時平の耳から頭を出した毒龍と浄蔵との、すさまじいまでの対決が伝えられている。毒龍は口から焰を吐出し、浄蔵に向かって恨みをつらねる。

筑紫ニテ中一年思ヒシヲモヒ、山トカナレリ、海トカツモリテ、世ヲハカナクセリ、ヒト、セ雷トナリテ其阿黨ヲ報セントセシカトモ、僧正ニフセカレテ叶ハザリシカ、今又イキトリヲハラサンカタメニ竊ニコ、ニキタレリ、 (洛陽北野天神縁起)

といった口調は、この系統の説話の成立に、死者の霊を呼び出す職能の者が関与していたことを想像させる。

毒龍は、浄蔵がどんなに祈ろうと、大臣は夕暮には必ず死ぬだろうと述べた。浄蔵が退去すると、夕暮を待たずに時平は死んだ。絵巻系に登場するのが時平・清行・浄蔵の三名で、そのうちの清行が

重要な役割を果たしているのに対し、安楽寺本系では清行は登場せず、浄蔵のすさまじい祈禱ぶりに焦点があてられている。その場には女房・君達・ヲサナキ人・一家一門が集って泣き悲しみ、浄蔵が時平に死相のあらわれているのを見て、祈禱の叶いたいことを告げると、病人ともども、祈禱によって黄泉路の安からんことを願ったと伝えられる。

時平は病苦のさなかであって、早く死にたいと告げ、浄蔵に生への可能性を否定されると、黄泉路の安からんことを願っている。この段を印象づけているのは、「死タル者ヲモ祈レハ則生カヘル」と言われる浄蔵の壮絶な祈禱と、それにも屈しない菅霊の憤りの深さであった。両者に介在する時平は、なすすべもない哀れな病人に過ぎない。時平は三十九歳で没しており、絵巻系もそのように伝えているが、安楽寺本系はこぞって四十九歳としている。

四

鎌倉期までの説話資料が伝える時平像と、それ以降の縁起系統の説話が伝える時平像は全く異ったものとなっている。天神の神徳を讃えることを目的とする縁起において、道真を失脚させた張本人である時平の性格が、おのずから規定されてくるのは、しかたのないことであった。

縁起系統の説話のうちでも、絵巻系は依拠した資料に比較的忠実であるが、安楽寺本系・御伽草子系になると、絵巻系をもとにしたがら、次第に独自の世界を創りあげている。

その流れのなかで、時平は次第に単純化され、誇張されて、悪役

としての性格を備えてきている。安楽寺本系は、絵巻系の内容をそのままに増幅しないしは削減することによって、縁起を道真の受難の物語に仕立てあげてはいるものの、時平の性格にそれほど大きな変化は認められない。わけもなく陥れられ、左遷された道真の憤りのすさまじさは、清涼殿落雷、浄蔵加持の場面においてあますところなく伝えられているが、それに対する時平は、ただ観音にすがることによってわずかに生きながらえ、浄蔵の加持によって黄泉路の安からんことを願う、哀れな存在にしかならない。

御伽草子系においては、時平は道真を陥れるために内裏に放火し、帝に讒奏して道真の首を切ろうとする。配流のことが決まると、嬉嬉として道真を捕え、監禁する。道真を排除すると、護送した武士たちまで抹殺する。そして落雷によって粉々にくだけ、壮絶な最期を遂げている。時平はここに至って行動性を獲得し、単純化され、悪役としての性格を十分に備えて登場しているわけである。菅霊の到来に前後もわきまえず、泣き悲しむところに、悪役として未成熟な部分を残しているとはいっても、一代の政治家をここまで悪役に仕立てあげたのは、庶民の持つエネルギーであったと思われる。

時平の性格の変化につれて、帝の果たす役割にも変化が生じている。絵巻系においては、帝は時平の讒言を信じ、道真配流の宣旨を下す。その報いを受け、地獄に墮ちた帝が、たまたま訪れた日藏上人に受苦のさまを告げ、今上への伝言を託したと伝えられている。

ここでは帝は道真配流の最高責任者として、時平以上の報いを受けている。安楽寺本系になると、地獄の描写は詳細になり、帝に対する責苦も凄惨を極めている。ただし、帝を苦しめているのは、自らの犯した罪の報いであって、道真の報復ではない。これに対して、

御伽草子系では、帝の役割は異なっている。帝は時平が道真の命を奪おうとするのを遠流にとどめており、最初から全面的に時平にくみしてはいない。清涼殿落雷の場面では、帝は後悔の涙を流し（奈良絵本「てんしん」、あるいは、「せんねんのことは、人の申せしに、よつてなり。まろかひか事、さらになし」）（天神絵巻・天神記・天神本地 刊本）と責任のがれをし、道真の報復は帝には及んでいない。帝は法性房の祈禱によって救われ、時平は全責任を負って、震死するわけである。

時平の最期は、単純化された描写も手伝ってか、それほど凄惨さを感じられない。むしろ、自らの悪の報いを受けて、死骸も残さずに死んでいくところに、ある種のいさぎよささえ感じられる。御伽草子系は、時平像の造形に、一応成功しているといつてよいだろう。御伽草子において形成された時平像は、近世演劇の世界に受けつがれ、悪役としてさらに成長を遂げている。

御伽草子系には、演劇の世界との交渉を推測させる要素が認められる。鷹巢晃氏は「菅丞相絵巻」の絵の構図に能舞台の、詞書に謡曲の影響を指摘しておられる。御伽草子における構成の簡素化、左大臣時平の狩衣・菅原大臣の束帯冠といった衣装による表現も、演劇との関連性から理解できないであらうか。

ここに取りあげたのは、鎌倉期までの説話資料と、室町期までの縁起系統の説話のみである。このほかにも軍記物語・謡曲などに天神関係の伝承が認められ、全体として複雑な様相を呈している。その点についてはここでは触れなかったが、主流となるのはあくまでも縁起系統であって、その流れのなかで、時平像の形成の過程をみてきたわけである。

残された問題については、近世における時平像の変遷の問題とあわせて、今後の課題としておきたい。

注

- (1) 本文は日本思想大系本による。
- (2) 本文は日本古典文学全集本による。
- (3) (2) に同じ。
- (4) 拙稿「宝物集の天神説話『長崎県立国際経済大学論集』第二十四巻第三・四号 平成3年3月
- (5) 村上学「神道集第九「北野天神事」ノート」(一)『名古屋大学国語国文学』15・17号
- (6) 表中、「物語集一」とするのは、横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集』第一巻 昭和37年、「大成十」は、横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十 昭和57年、「大成補遺二」は、同補遺一 昭和63年、「御伽草子絵巻」は、奥平英雄編『御伽草子絵巻』昭和57年、「神道大系」は、真壁俊信校注『神道大系』神社篇十一 北野 昭和53年、「東洋文庫本」は、近藤喜博編『神道集東洋文庫本』昭和34年をさしている。
- (7) 拙稿「伴善男の説話について―『江談抄』所収説話を中心に―」『福岡女子短大紀要』21号 昭和56年6月
- (8) お伽草子「天神本地」における時平の造形については、村上氏がさきにおげた論文の中で、時平の「外表的、行動的な悪役としての印象化」として、本地物の造形と関連づけてとらえておられる。
- (9) 五十嵐本御伽草子「菅丞相絵巻」―天理一巻本との比較を中心に―早稲田大学美術史学会『美術史研究』18 昭和56年3月